

## 1. はじめに

2020年春からのコロナ禍において、地域と連携した研究を積極的に進めることが困難ななかで、実施可能な連携のあり方が模索されている。コロナ禍が収束した後につなげていくためにも、これまでに行われてきた取り組みについて、それが備忘録や中間報告のようなものであったとしても、書き残しておく意味はあろう。

2002年度より地域と連携した研究を開始した神戸学院大学地域研究センターでは、2005年度から明石市大蔵地域において、文化人類学分野を中心に映像を用いた連携が行われてきた。筆者は2010年度から大蔵地域での研究を試行的に開始し、現在まで写真映像を用いた大蔵地域との連携を試行錯誤しつつ行ってきた。このうち2011～14年度の地域研究センターにおける写真映像を活用した連携研究については矢嶋（2015）に記した。本稿は、その後続けられてきた写真映像を活用した連携の取り組みについて振り返る。

大蔵谷村は明石城下町を擁する明石町の東隣の村で、近世には宿場町として繁栄した（平凡社地方資料センター編 1999）。1889年の市制町村制施行時に明石町の大字となった。図1に示されるように、明治中期には、海岸近くを東西方向に延びる西国街道に沿って集落

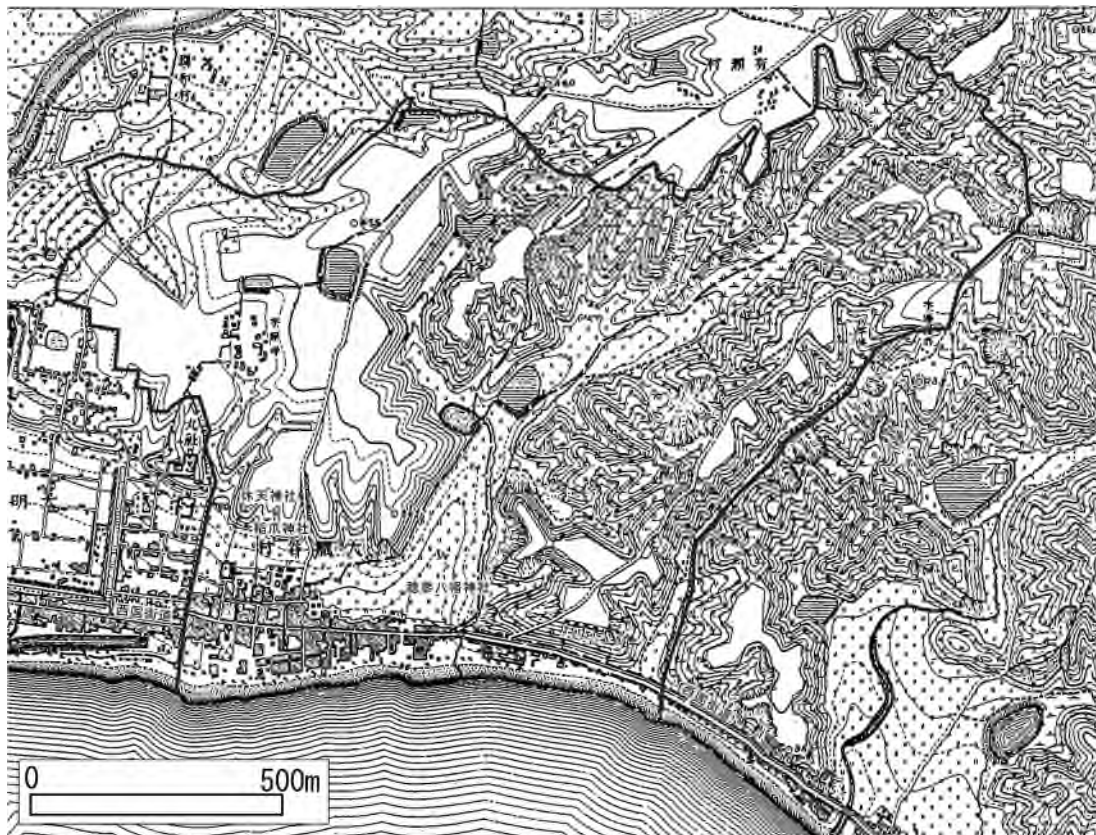


図1 1886年頃の大蔵谷村域  
陸軍陸地測量部仮製地形図「須磨」に加筆して作成

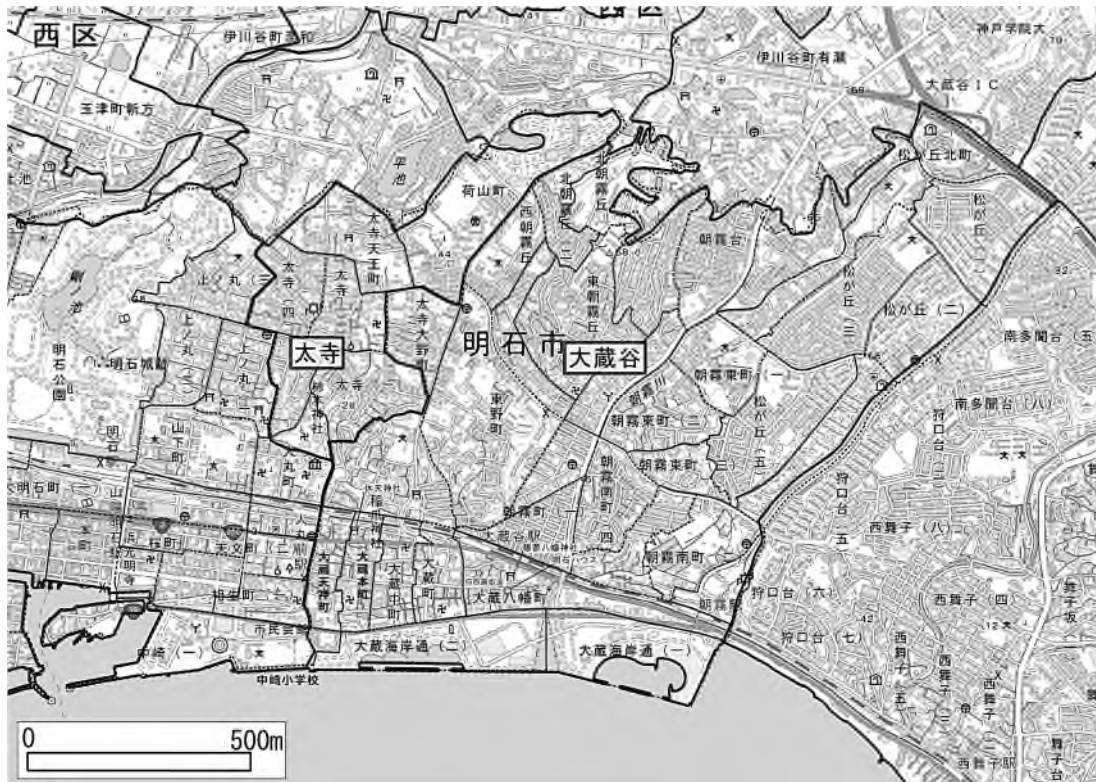


図2 現代の大蔵地域と旧大蔵谷村域

国土地理院地理院地図タイル上に、2015年の農業集落境界（太線）と町丁界（点線）を示した。

が位置していた。この集落は、現在では西から大蔵天神町、大蔵中町、大蔵本町、大蔵町、大蔵八幡町となっており（図2）、本稿でいう大蔵地域はこの範囲である。なお、『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』によれば、1927年に大蔵町1～8丁目となった。旧郷社で旧大蔵谷村の氏神である稲爪神社の宮司である菅谷氏からの聞き取りによれば、氏子区域はこれより広く、西方の旧明石城下町にまで及んでいるとされる。稲爪神社の秋例大祭における神幸行列では、神輿が魚の棚商店街の巖島弁財天社より西まで入ることから、魚の棚ではその付近が明石城下町建設以前の大蔵谷の西端付近であった可能性があるが、詳細は不明である。

## 2. 写真を活用した稲爪神社行事との連携

2002年度より地域と連携した研究を開始した神戸学院大学地域研究センターでは、2002～09年度に行われた文部科学省学術フロンティア推進事業研究において、2005～09年度にかけて映像を用いた連携が、文化人類学分野を中心に実施された（岩谷・寺嶋・早木・五十嵐2008）。

2011～13年度における文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による明石グループの研究および2014年度神戸学院大学人文学会事業「地域連携によるアクティブラーニング授業の実践的研究」では、1回生後期の桑島ゼミと矢嶋ゼミにおいて、明石市大蔵地域をフィールドとして、稲爪神社秋例大祭など大蔵地域において行なわれている行事や祭

表1 地域研究センターによる大蔵地域における写真展開催や開催協力

年度	稲爪神社夏祭り写真展 (7月)	中崎まちづくりの会 夏祭り写真展 (8月)	稲爪神社正月写真展 (12月～1・2月)
2011	—	—	開催
2012	—	—	開催
2013	開催	—	開催
2014	開催	—	開催
2015	開催	開催協力	開催
2016	開催	開催協力	開催
2017	開催	開催協力	開催
2018	開催	開催協力	開催
2019	開催	開催協力	開催
2020	コロナ禍のため行事中止	コロナ禍のため行事中止	開催（回顧展のみ）
2021	コロナ禍のため行事中止	コロナ禍のため行事中止	開催（回顧展を含む）

礼における学生自身による写真撮影を活用した参与観察、大蔵地域の事業所への取材、地域環境理解のための大蔵地域の撮り歩きが実施された。

これまでの地域研究センターによる大蔵地域との写真展開催や開催協力の連携について、表1に示した。これを見ての通り、2011年度以降、12月末から1、2月下旬にかけて（終了日は年によって異なる）、稲爪神社境内参道において正月写真展を開催してきた（写真1）。また、2013年度からは、7月に開催される夏祭りでも写真展を実施してきた。

写真2は2015年度の、写真3は2016年度の夏祭り写真展の様子である。写真3では、貼られている写真の下に、1枚ずつ白い紙が添えられていることがわかるが、これは観覧者が必ずしも地域の事情に詳しいとは限らないため写真の内容がわからないことがあり、



写真1 2014年度の稲爪神社正月写真展設営  
2014年12月25日筆者撮影



写真2 2015年度の稲爪神社夏祭り写真展  
2015年7月5日筆者撮影

説明があった方が良くとする神社からの要請に対応して添えるようになったタイトル票で、2015年度の正月写真展（2015年12～2016年1月）以降付している。題名、撮影者、撮影年月日、写真についての一言が記されている。

3回生矢嶋ゼミ（2015～18年度は地域社会専攻演習Ⅱ、2019年度は専攻演習Ⅰ）では、毎年7月上旬に行われる稲爪神社夏祭り学生による参与観察を行ってきた。この祭りに



写真3 2016年度の稲爪神社夏祭り写真展  
2016年7月10日筆者撮影



写真4 金魚すくいの露店

2017年7月2日筆者撮影



写真5 ラムネ販売の露店

2017年7月2日筆者撮影



写真6 飲み物販売とくじ引きの露店

2018年7月1日筆者撮影



写真7 囃口流し

2019年7月7日筆者撮影



写真8 学生による露店の撮影

2018年7月1日筆者撮影



写真9 学生によるすいか割りの撮影

2019年7月7日筆者撮影

は、稲爪神社秋例大祭で活躍する稲爪神社神輿青年団、稲爪神社獅子舞保存会、稲爪神社獅子舞保存会西之組、大蔵谷囃口流し保存会などが、例年飲み物販売や金魚釣りといった露店を出店している(写真4・5・6)。また、出し物として、スイカ割り大会やスイカ種飛ばし大会、地元のミュージシャンが出演する音楽ステージ、囃口流し(写真7)、明石市の王子太鼓の演奏、越中八尾おわら道場関西支部風の盆おどりなどが行われ、地域研究センターによる写真展もその一つに位置づけられている。

夏祭りには祭礼関係者の親族を含む多数の子供が訪れ、大賑わいとなる。矢嶋ゼミでは、地域研究センターが所有するデジタル一眼レフカメラを学生一人一人に貸し出し、この行事のさまざまな風景の撮影記録にあたってもらっている（写真8・9）。その際、撮影した写真が、以後に開催される正月および夏祭り写真展の展示写真となることが期待されていることを説き、積極的な撮影を要請している。祭礼関係者も、正月や夏祭り写真展で掲載される可能性があることを理解したうえで積極的に撮影に応じ、学生に話しかけたりすることもあるほか、学生に上記出し物への参加を促すこともある。教員としては、学生が地域社会の一つのあり方を学ぶ機会と位置づけるとともに、インテンシブなフィールドワークにおける写真撮影や聞き取り調査のための練習の場と位置づけている。

矢嶋ゼミでは、1回生後期の基礎演習、2回生前期の実践演習Ⅰ、同後期の実践演習Ⅱ、3回生後期の専攻演習Ⅱで、大蔵地域においてフィールドワークを行ってきた。例年、基礎演習・実践演習Ⅱ・専攻演習Ⅱでは、稲爪神社秋例大祭の神幸行列での献灯やたい（男子）・女衆みこし（女子）担ぎを行う。基礎演習では担ぐ前までの大蔵地域での神幸行列や獅子舞の町回りの様子を、専攻演習Ⅱでは学生が担いでいる時の神幸行列の様子を、実践演習Ⅱでは、宵宮に大蔵地域の各所で営まれる囃口流しと獅子舞の町回りの様子を撮影する。また、秋例大祭とは別に、基礎演習において大蔵地域で撮影フィールドワークを行い、実践演習Ⅰ・Ⅱにおいては街並みの変化を把握するフィールドワークを行う。こうした際に学生が撮影した写真も、稲爪神社における写真展の展示候補となる。ただし、2020・21年は新型コロナウイルス感染拡大のため、稲爪神社の祭礼を含む大蔵地域でのイベントの多くが中止された。2020年度は学生による学外見学が見合わせられ、参加も希望者に限られたため、大蔵地域でのフィールドワークは断念した。感染拡大が一時的に収まっていた2021年11月7日に基礎演習で大蔵地域でのフィールドワークを行い、学生が撮影した写真の一部を2021年度正月写真展で展示することができた。

### 3. 写真を活用した中崎まちづくりの会との連携や地域との関わり

2014年度より、大蔵地域における明石市のまちづくり協議会（地域運営組織）である中崎まちづくりの会が活動を開始した。明石市では、筆者も中崎まちづくりの会に年度当初から参画することとなり、歴史・文化部会に所属し、2014～16年度にかけては部会長を担当した。これは、中崎まちづくりの会の役員が稲爪神社の祭礼において主力を担ってきた関係者と重なることから、これまで連携をしてきた地域研究センターに声がかかったことによる。

中崎まちづくりの会は、明石市にある28の小中学校区ごとに設置された地域運営組織の一つで、2014年に明石市では28番目に発足した。明石市の南東端に位置する中崎小学校区は、西端の明石港東部の中崎2丁目から東端の山陽本線朝霧駅南側の大蔵八幡町までの東西に広い範囲で、大蔵地域は中崎小学校区の東半部にあたる（図3）。

中崎まちづくりの会は、本部、交流部会、安全安心部会、環境部会、福祉部会、歴史・文化部会からなり、本部が主催して夏祭りや自主防災訓練を開催するほか、部会がそれぞれの目的に応じて、スポーツフェス、市民救命士講習会、クリーンキャンペーン、ふれあい喫茶、歴史・文化ウォークといったイベントを開催してきている（中崎まちづくりの会

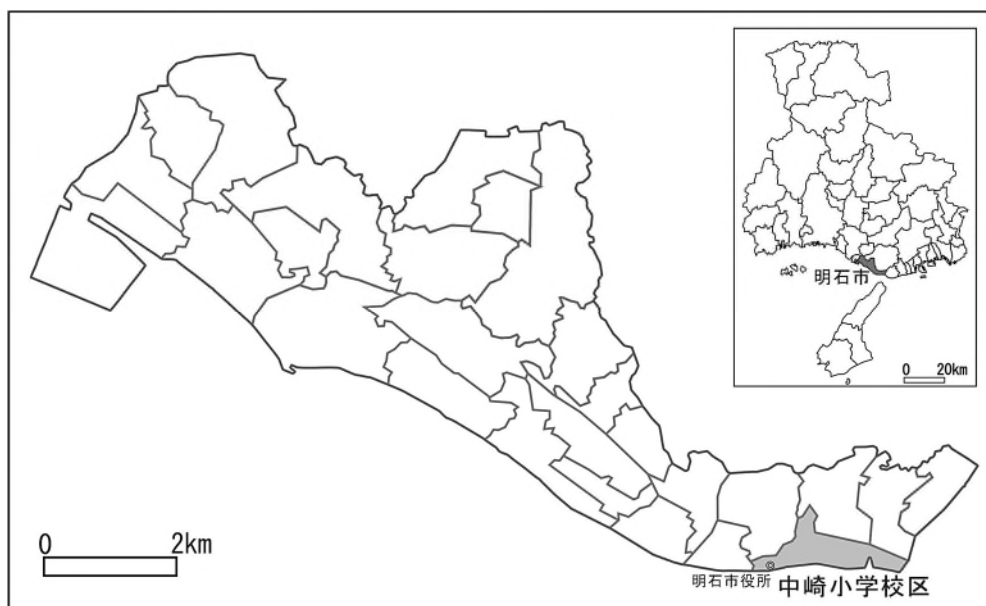


図3 兵庫県明石市の中崎小学校区における区域  
明石市コミュニティ・生涯学習課の資料をもとに作成

事務局 2017、山本・矢嶋 2020)。

このうち夏祭りは、8月上旬に中崎小学校グラウンドで、2014年から開催されてきた。音楽やダンスなどのステージ上演(写真10)のほか、各種団体による露店出店、明石音頭などの盆踊り(写真11)が行われる比較的規模が大きいイベントで、来場者も多く、市長や地元選出の衆議院議員が挨拶に来ることもある。

2015年からは、歴史・文化部会が担当して、前年度に開催された夏祭りや中崎まちづくりの会のさまざまなイベントで撮影された写真を展示してきている(写真12・13)。展示される写真は概ね1年度の中崎まちづくりの会の活動を網羅し、同会の活動を小学校区住民に広くアピールする役割も担っている。この取り組みは、当時副会長であった高尾氏(現会長)から稲爪神社で行っている写真展と似たスタイルでの写真展開催を打診されて対応したもので、地域研究センターのノウハウを活かした取り組みともいえる。



写真10 2019年の中崎まちづくりの会夏祭りステージにおけるPTA有志による出し物  
2019年8月3日筆者撮影



写真11 2017年の中崎まちづくりの会夏祭りの盆踊りと露店群  
2017年8月5日筆者撮影



写真 12 中崎小学校南校舎玄関を利用して行われた2015年中崎まちづくりの会夏祭り写真展の実施状況

2015年8月1日筆者撮影



写真 13 中崎小学校の塀を利用して行われた2019年中崎まちづくりの会夏祭り写真展の実施状況

2019年8月3日筆者撮影

当初、中崎小学校の玄関扉のガラスを活用して展示することとなったため、歴史・文化部会の宮田氏と検討し、稲爪神社写真展で使用しているプラ段の代わりに黒色模造紙に写真を貼り付けて展示することとなった。写真 12 をみてのとおり、2015年の開催時には写真の下にタイトル票はないが、開催準備を担当した中崎小学校のPTAに依頼して、写真に対するコメントを付箋紙に書いてもらって添付することにより、写真を見せるだけの写真展にならないように試みた。2016年からは、前述した稲爪神社正月写真展の開催経験を活かし、タイトル票をつけるようになった。また、展示場所がグラウンドから離れていて注目を集めにくいとの反省から、2018・19年は、夏祭り会場入口となる小学校正門に続く塀を使用して開催された（写真 13）。なお、2017年からは、部会長の松岡氏、宮田氏、筆者が、写真展開催を担っている。

2017年に策定された同会のまちづくり計画書には、小学区にある活動団体の一つとして神戸学院大学地域研究センター明石ハウスが挙げられている。ここでは、中崎まちづくりの会が「地域のために活動をされてきた他の団体やグループとの連携をはかり、協働で地域に根ざした活動を目標にしてい」とあり、地域研究センターにおける取り組みとの連携も期待されていることが伺える。

前節に記したとおり、矢嶋ゼミでは、例年大蔵地域でのゼミフィールドワークを実施してきた。3回生の専攻演習では、加古川市西神吉町の都市近郊農村において合宿形式の研究調査を、例年夏季休業中に実施してきたが、コロナ禍のため、2020・21年度とも宿泊をともなう研究調査を実施することができなかった。感染拡大が一時的に収まっていた2021年7月17日には、専攻演習Ⅰで朝霧駅から本町通り商店街までの旧西国街道を15名のゼミ生が踏査し、大蔵地域で街並みを観察するフィールドワークを行った。また、夏季休業中の9月13・14・16日には、中崎まちづくりの会関係者を明石ハウスに招いて、大蔵地区の買物環境の変遷、阪神・淡路大震災での被災経験、校区まちづくり組織である中崎まちづくりの会による防災訓練の取り組みについての聞き取り調査をオンラインで実施した。

残念な事例ではあるが記しておくべきこととして、2017年10月25日に明石市大蔵中町の大蔵市場が全焼した火災に関して写真を提供したことが挙げられる。大蔵市場内部の写真が必要としていた報道機関が、稲爪神社から神戸学院大学地域研究センターが撮影して



いる可能性があるとの情報を入手し、地域研究センター事務局に問い合わせてきた。そこで、運営委員で検討したうえで、サンテレビと関西テレビに教員や学生が過去に撮影した写真を提供した。とくにサンテレビの報道番組 NewsPORT（2017年11月21日21時放送）が、提供した複数枚の写真を使用し、火災リスクへの対処法について報道していた。

#### 4. 初等教育社会科教材にみる明石で撮影された写真の活用事例

明石で撮影された写真を掲載した初等教育教材について触れておきたい。

2019年検定小学校社会科用教科書『新しい社会3』（東京書籍）の「4 市のうつりかわり」で、明石市が取り上げられている（図4）。地形と暮らしとの関わり、交通、都市化、



図4 明石市が題材に用いられている小学校3年生用社会科教科書資料：『新しい社会3』（東京書籍2021年発行）



図5 明石駅前のうつりかわりを紹介した大単元の一部（124頁）資料：『新しい社会3』（東京書籍2021年発行）

人口、公共施設の変化など、環境と人々の暮らしの変化が地図や写真を用いて説明されている（124～141頁）。とくに、明石駅前と明石駅南側の国道2号線交差点については、1950年代、1970年代、近年の写真が掲載され、比較して地域の変化を読み取ることを促している（図5）。また、1919年の市制施行時の市役所、昭和初期の電車、第二次世界大戦末期の空襲後、1967年に完成した明舞団地、1973年の造成中の二見人工島などの写真が掲載されている。

明石市教育委員会が作成している小学校3・4年生用の副読本『令和3年度版 わたしたちの明石』（図6）には近年撮影されたと思われる多数の写真が掲載されている。また、「4. かわってきた人々の暮らしと市の様子」では、古い写真が掲載されていて現代の様子と比較することが促されているほか、新旧の写真が掲載されて比較できるようになっている。後者では、1933年と近年の人丸町子午線郵便局前付近の国道2号線を撮った写真が掲載されている。



図6 『令和3年度版 わたしたちの明石』の表紙

なお、コラム「知ってる？明石 その8」には、「昔から残っている道（大蔵八幡町付近）」と題した写真が載っていて、明石ハウス西隣に位置する明石市の景観形成

建築物 2 軒が写っており、明石ハウスの壁の一部も写っている。また、稲爪神社の牛乗り神事が写真とともに紹介されている。

## 5. おわりにかえて

本稿は、コロナ禍が収束した後に地域と連携した研究をつなげていくことを視野に、神戸学院大学地域研究センターによる明石市大蔵地域における写真映像を用いた連携のうち、矢嶋（2015）が記した後に続けられてきた連携の取り組みについて振り返り、書き残しておこうとするものである。

これまでの取り組みを概観し、地域研究センターの写真映像を活用した大蔵地域での連携研究における学生によるフィールドワークを継続できている要因に、稲爪神社写真展の開催が主たる原動力の一つとなっていることが挙げられる。稲爪神社で神戸学院大学地域研究センターが写真展を開催することにより、大蔵地域の多くの住民に存在が認識されていると思われる。学生の教育のためのフィールドとして大蔵地域を使わせてもらうためには、地域住民の理解は必須である。写真映像を用いた連携は、教員も学生も取り組みやすい。これを続けていくことの意味は小さくない。

### <文献>

岩谷洋史・寺嶋秀明・早木仁成・五十嵐真子（2008）「映像をもちいた地域との連携について—人類学的な課題を通じて—」神戸学院大学地域研究センター編集発行『文部科学省学術フロンティア推進事業 阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究 報告書第 28 号』 pp.43-55

中崎まちづくりの会事務局編集発行（2017）『中崎まちづくり計画書 素敵なまち中崎—明日にむけて—』

平凡社地方資料センター編（1999）『日本歴史地名大系第 29 巻Ⅱ 兵庫県の地名』平凡社  
矢嶋 巖（2015）「大蔵地域における写真撮影を活用したフィールドワーク」神戸学院大学地域研究センター編『神戸学院大学人文学会 2014 年度事業地域連携によるアクティブラーニング授業の実践的研究 明石ハウスを拠点とした調査・研究の継続、維持のための活動研究成果報告書<地域研究センター明石班>』神戸学院大学地域研究センター、pp.30-40

山本陸翔・矢嶋 巖（2020）「住民による防災訓練の取り組み—兵庫県明石市を事例に—」兵庫地理 65、pp.53-66

### <謝辞>

本研究は JSPS 科研費 19K12491 の助成と神戸学院大学人文学部研究推進費による成果である。